

# 教育開発国際協力研究センターの社会貢献からの逆転の発想 —算数・数学教育分野の場合—

礒田正美

人間総合科学研究科助教授 教育開発国際協力研究センター

日本の教育経験をふまえ、途上国への発信型教育協力とその研究開発を進める教育開発国際協力研究センター（CRICED）は、教育学系・心身障害学系を母体に5年前に設立された。設立背後には、創起（明治5年）以来の教育界における本学の役割、過去20余年の教員研修留学生受入実績がある。センターといっても教員3名、事務員1名が、関係組織と連携業務する実態にある。

CRICEDは、中期計画・中期目標において社会貢献枠に位置づけられる。国立大学時代の業績評価とえば研究・教育・社会貢献の順に重みがあった。法人化後、社会貢献は新規予算獲得の目玉となった。評価の低い社会貢献組織からの発想も時に興味深いと考え、以下、私個人の視野から法人としての眺望を探る際の材料を提供したい。

## 1. CRICEDの社会貢献の追風と責任

わが国が「国際社会において確かな役割

を果たすこと」をめざし推進される政府開発援助は、1991年の「万人のための教育」宣言以降、「箱物から人材開発」へ推移し、漸次、学校教育段階に焦点化した。本学は、国際協力事業団（JICA：現、国際協力機構）初の学校教育段階技術協力フィリピン数科プロジェクト（1992-1999、清水静海・長洲南海男）を推進するなど、その動向をリードしてきた。現在、CRICEDは算数・数学7カ国、情報1カ国、障害児1カ国に係るJICA教育プロジェクトを推進している。

文部科学省は、2003年より「国際教育協力のための拠点システム構築事業」を推進し、CRICEDを中核センターに位置づけた。背後には、大学の外部資金獲得基盤作り政策がある。既に学校教育分野において広島大学、神戸大学等が民間コンサルタント会社とJoint Ventureを組織し、数億円のJICAプロジェクトを受注した。その受注額は、既存の個人協力経費の数十倍を超える。JICA

は、プロジェクトの多数をコンサルタント契約に移管した。旧帝大や著名私大は、受注責任が発生することを承知でその体制作りを進めている。

平成17年度、筆者は、アジア太平洋経済協力（APEC）よりプロジェクトを受託し、1月に筑波大学・APEC国際会議「授業研究による算数・数学教育の革新」を実施した。国際プロジェクト受託は、中核センターであるCRICEDが、過去3年、国内組織作りを進めてきた成果の一つである。平成17年度科学研究費のCRICEDの採択率は100%であり、筆者が代表者として申請した4件すべてが採択された。結果として平成17年度に筆者が携わった各種プロジェクト総額は7千万円に及ぶ。その資金によって研究員・職員を雇用し、雇用された職員で業務推進する実態にある。

雇用による米国型業務展開は羨まれもするが、その業務量・内容を知るや「それが研究者の仕事か」と気の毒がられる実態にある。経費すべてに成果ノルマがあり、その実現が常時評価される。腰を落ち着けて研究を楽しむ世界は遠くなる。社会貢献で得られる資金は、発生する責任に対する対価、世間の人様に直接役に立つ仕事への対価であり、その成果を上げる以外に使いようもない現実は知られていない。

## 2. 連携の一例としての附属学校との協同

CRICEDの学内連携先の一つが附属学校である。学校教育分野における内外の期待が筑波大学にかかるのは、関連学系の実績はもちろん、附属学校の実績に依拠している。日本の質の高い教育が世界で評価された80年代以後、附属学校の教育が日本や世界の教育モデルとして注目を浴びてきた。その社会的期待を受け、CRICEDは全附属学校と連携している。

特に、附属小学校算数部と共同実施したJICA研修は、今年度に限っても3カ国（計10週間）に及び、附属学校との連携の中で突出している。「万人のための教育」実現、「初等教育優先」原則という世界の課題が、附属小学校への期待として現れている。

連携の典型として、附属学校による海外での出前式授業研究を挙げることができる。附属学校の先生方が、現地で同時通訳・逐語通訳を受けて授業公開し、日本式の「教育の質の改善」方法を現地の先生方と共有している。例えば、障害児教育分野では、インドネシアに過去2年間、延べ6名の附属教員を派遣し授業研究会を実施した。

特に日本型授業研究の元祖である附属小学校の場合、これまで多年に渡り米国で算数授業研究会を実施し、米国における授業研究動向をリードしてきた。現在、附属小学校算数部はその実績を世界展開する構想

で取り組んでおり、すでにJICA協力の一環としてホンジュラスで授業研究会を実施し、平成18年度にはチリ、タイへ授業研究会を拡大することも決まっている。

### 3. CRICEDの筑波大学への貢献

大学は、従来、身分と予算の存在を前提に会議で仕事分担する手順で運営されてきた。減額され続ける運営費交付金はその方針を揺るがしている。CRICEDは、外から仕事を取り、必要経費を得て人を雇用し、関連組織と共同し社会貢献する。そのような組織の存在意義は何だろうか。

第一にCRICEDは、筑波大学の行う社会貢献実践の広告塔になっている。平成17年度に文部科学省と共催した会議は5件、海外から受け入れた研究者数も100人を越える。筑波大学と文部科学省の名を併記したポスターが全国の大学・関係機関で掲示され、報道機関から取材も受ける。開学以来の教員の活躍と建学の理念に反し、その地理的状況から「辺境」と揶揄されてきた大学がである。創起以来の伝統に立ち、首都圏から内外へ発信する活動は、筑波大学の本来の力を示す機会になると考える。

第二に、教員養成・研修機関としての附属学校や大学の役割を国内から世界へ広げる役割である。筑波大学が日本初のJICAプロジェクトを理数科で推進した十年前には、

その国際貢献は個人貢献とみなされた。今日では、そのような貢献こそが組織成果として新規予算獲得根拠になった。附属学校の存在意義も、CRICEDと連携した国際貢献を通して益々堅固なものになる。

第三に、本省や国際機関とやりとりする資金獲得窓口としての役割である。周知のように学外ニーズとのすり合わせぬきで概算要求する時代ではない。社会ニーズを前提に仕事をするCRICEDは、本省や国際機関から要請を受ける。削減される運営費交付金以外の資金は、資金を配分する側が求める計画である場合に獲得できる。

第四に、研究者養成機関としてのCRICEDの役割である。過去2年間で博士課程等から受入れたポスドクは9名(教育学研究科4名、心身障害学研究科1名、システム情報工学研究科3名)、内4名がすでに栄転した。

### 4. 社会貢献からのアプローチ

従来型価値基準からすれば粗末にみえる社会貢献は、逆に社会からの資金獲得、大学の社会的自立に有効な方法である。

そのために提案したい逆転の発想の第一は、「社会のニーズや評価を前提にして仕事を受ける」という発想である。学内ニーズは学内にある。社会貢献ニーズは学外にある。獲得予算額やプロジェクト受託数、

予算規模は、その分野の社会的ニーズのバロメータである。研究者のライフサイクルに依存した学術研究上の金字塔、長期的に見た組織的人材排出、短期決戦型社会貢献、実はいずれも評価基準は学外である。

逆転の発想の第二は、「仕事をとれば、予算や人は後から確保される」という発想である。従来は、人と予算があり、何をするかを相談する日常にあった。人も予算もないCRICEDは、仕事を取る営業が日常である。時間をかけて獲得したプロジェクトや研修があり、その実施経費を得て雇用や関係組織との実施体制を整える。相手が望む事業では、資金は相手が用意する。

望まれる提案をして仕事を確保する手順は、時に組織内で軋轢や疑心暗鬼を生む。提案したい発想の第三は、「対応できる分野から始め、得意分野を作り、必要な他分野へと広げる」戦略である（これは文部省拠点システムの基本戦略でもある！）。

対する既存の発想は組織横並びである。横並びでは、例えば対応しない分野から尤もな疑問が出る。組織内に負担を偏在させる新事業の合意は時に容易でない。止めるのは容易いが、機を逸すれば立ち切れる。

機を逸することなく対応分野の提案が自然とみなされることで、対応できない分野の間口も広がる余地も生まれていく。

実際、数学・理科教育JICAプロジェクト

は、1992年にはフィリピン1カ国だったが、現在26カ国以上に拡大した。同時に、他の教育分野へも拡大した。CRICED設立年には、ホンジュラス算数指導力向上プロジェクトのみがJICA技術協力だった。ホンジュラス算数指導力向上プロジェクトに冒険承知で手を上げた結果、文部科学省・JICA側の期待も増し、中南米地域はCRICEDの得意地域となり、平成18年度には、中米「算数」・「日本の教育」・「障害児教育」、チリ「算数・数学」、日系「授業研究」・「情報」・「数学」などへ受入研修が拡大した。

## 結び

CRICEDの事業は偏<sup>ひとえ</sup>に関係者との協同、配慮でなしえるものである。社会から仕事を頂けるのは、なによりも関係組織の社会的評価の賜物である。記した逆転の発想もジンテーゼを得る契機に過ぎない。かく言う私も、逆に自らの研究と教育とのバランスが課題になる。

地域性に乏しい本学は、日本や世界を相手に社会貢献する戦略が重要になる。社会貢献する気にさせる大学経営戦略も動いている。人を生かすも潰すも組織と関係者、本人の心持。障害が山積でも、支持や肯定評価があれば誰もが勇気付けられる。温かく育てていただければ幸いである。

(いそだ まさみ/数学教育学)